

■随想

日本人と漢字

林 史典(高12回)

漢字文化圏の中の日本

言語が生まれた時期は明らかにできない。しかし、現生人類は既に言語と呼べる伝達手段を有したと考えればおよそ15〜20万年の、遅くとも彼等がアフリカからユーラシアに進出した頃には言語を獲得していたに違いないとする推定に従えば、言語は略々5万年の歴史を持つこととなる。それに対して、文字にはせいぜい5000年ほどの歴史しかない。文字は文明が一定の水準に達しなければ生まれえないからである。

古代エジプト文明にヒエログリフがあり、古代オリエント文明に楔形文字があるように、世界の主な古代文明はそれぞれ文字を生み出した。漢字もその一つで、殷朝後期の甲骨文字（BC1300年頃）に遡る。甲骨文字とは亀甲・獣骨に卜辞を刻んだ文字のことで、未だ絵画



●はやし・ちかふみ
高12回卒、飯田市羽場出身。聖徳大学教授。筑波大学名誉教授。前文化審議会委員（国語分科会長）。専門は日本語学。趣味？はお酒（ワイン）とスポーツ観戦。最近の関心事はオペラ。

的特徴をとどめるが、以後、幾たびか字体を変化させて後漢末（3C）には楷書が成立した。

この漢字に象徴される古代中国文明の広がりを「漢字文化圏」という。これを唐代において眺めると、広大な東アジアの大部分を覆い、北は契丹のモンゴル系、ウイグルのトルコ系文化圏に、西は中央アジアでイスラムの文化圏に、西南・東南ではチベット・ヴェトナムでインドの文化圏に接している。東は朝鮮半島を経て、海を隔てた日本にまで及ぶ。

日本が漢字文化圏に取り込まれた時期もまた限定できないが、漢字が伝えられた極初期の痕跡、すなわち「漢委奴国王」の刻字がある福岡県志賀島出土の金印や、「漢泉」の文字を刻んだ新・王莽時代の銅銭によれば1世紀がそれにあたる。もともと、漢字のような体系の大きな複雑な文字は、伝来がそのまま使用を意味しない。日本

で漢字が使われた形跡が現れるのは漸く5世紀末、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の出現にはそれからまた200年以上の年月を要した。特権的識字層においてさえ、漢字を我が物にするのにこれだけの時日が必要だったわけだから、それが大衆の手に渡るにはさらにずっと長い時間がかかったとしても異とするに足りない。最古の瓦版は17世紀初、洒落本・読本のような庶民の読み物が現れるのは江戸後期の18世紀後半、漢字を含んだ文章を誰もが読み書きできることを疑う必要がない時代に入るのは、実に20世紀である。漢字が今日のように日本人の一人ひとりに行き渡るのに2000年近い年月を要したことは注目に値する。

漢字は日本語以外にもいくつかの言語に借用され、仮名のほかにも新しい文字を生み、また、いくつかの文字の作成に影響を与えた。日本語以外に、漢字を正式な文字として用いた歴史があるのは朝鮮語とヴェトナム語である。そのうち、ヴェトナム語は、チュール・ノム（字喃Ⅱ漢字から作られたヴェトナム語固有の文字）を使うようになった10〜11世紀以後も漢字を正式な文字としたが、20世紀初にはラテン文字を改良したチュール・クオック・グー（字国語）に取って代わられている。朝鮮語がハングルを作ったのは15世紀である。しかし、それが（国

字）としての地位を得るのは19世紀末。それまではやはり漢字が正式な文字として使われ続けた。そして現在、北朝鮮には既に漢字が無く、韓国でも漸廢の方向にある。中国語圏を除けば、なお漢字を使い続けているのは日本語だけになった。

日本語に用いられる漢字

人類が作り出した文字はおよそ400種類という。その中で、漢字のような「単語文字」、すなわち一字一字が原則的に一単語を表すタイプの文字が最も難しい。字種が多く、字形も複雑だからである。例えば、平均的日本人が日常の読み書きに使っている漢字は2000〜3000字。これを仮名（46字）、英語のラテン文字（26字）と比べると、それぞれ43〜65倍、77〜115倍にもなる。区別すべき字種が多くなれば字形も複雑になるのは当然で、仮名やラテン文字が1〜3画、多くても4画で足りるのに対し、漢字は10〜20画がごく普通、日本語の常用的漢字にも「鑑」「驚」「顧」などのように20画を越える字が稀ではない。「鬱」に至っては29画にもなる。それに加えて、日本語では（読み）が用法を極度に難しくしている。だから、日本語で用いる漢字は、中国語で用いる漢字よりはるかに難しい。外国人が日本語の習

得に挫折する大きな原因はこの漢字にもある。「生」は「生活」で「セイ」、「生涯」で「シヨウ」、「生まれる」「生きる」「生える」では「う(まれる)」「い(きる)」「は(える)」と読む等々、字として覚えていても単語として覚えていないと使いこなせない。

「セイ」「シヨウ」のような〈音読み〉は、元になった中国語音の変化したものである。ヴェトナム語・朝鮮語では唐代の音の影響がきわめて大きく、それまでそれぞれの言語で使われてきた古い音読みはそれによってほとんど一掃されてしまったが、日本語では唐代の音が変化した「漢音」のほかに、それまで使われてきた古い読み方(「呉音」を残し、字によっては唐末以後に伝わった新しい音にもとづく読み方(「唐音」「華音」など)も用いている。日本語で用いる漢字の音読みにはいわゆる重層性が認められ、それが中国語音韻史研究の貴重な資料にもなっている。

「う(まれる)」「い(きる)」「は(える)」のような〈訓読み〉は、漢字にそれを受け入れた言語を結び付けたもので、日本語にしか存在しない。ヴェトナム語・朝鮮語には訓読みが生まれなかった。日本語に訓読みができた下地は、偏に漢文の訓読にある。訓読とは要するに、中学や高校の「国語」の時間(高校には「漢文」の時間があった時期もある)に勉強した「過ぎたるは、なほ及ば

ざるがごとし(過猶不及)」のような読み方、あれである。日本では、中国から文献が伝えられた最初の頃から訓読を行ったらしい。平安時代初期には、本文に訓法を記入した経巻なども現れる。このような読み方は、独特の文体を作った。「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の过客なり。而して浮生は夢の若し…」(李白)のような韻律や格調を好む人は少なくないと思う。

「訓読」「読み下し」などとは言うが、実のところ、これは、漢字・漢語に訳語としての日本語を当て、時に漢語をそのまま中国語で読んで、語序を日本語に変換した一種の直訳的翻訳文である。結論的に言えば、漢字・漢語の〈訳語〉として生まれ、それが〈読み〉にまで変質したものが訓読みである。「生」は「う(まれる)」「い(きる)」「は(える)」のほか、「生い立ち」「生野菜」「生一本」では「お(いたち)」「なま(やさい)」「き(いっぽん)」などと読む。その一方で、「とる」を「手に取る」「山菜を採る」「魚を捕る」「筆を執る」「写真を撮る」などと書き分ける。このように複雑な一字多訓、同訓異字も、つまりは訓読みが訳語に発することに起因している。日本人は何年もかけて漢字の読み書きを覚えなければならぬ。その結果得られる代償が、漢字の持つ優れた表語力と表現力とである。表語力とは、文字が単語を直

接表示し、従ってその語を直接読み取ることができると、すなわち「やさしいかんじ」は「優しい感じ」「易しい漢字」などと書くことによって、それが用いられた文脈を顧みることなく直ちにかつ間違いなくその意味が了解される、そのような機能のことである。日本語はこれによって読み取りを効率化し、同時に記字数を減らすことに成功している。

漢字が持つ表現力とは、音声や仮名では表せない意味や感じの違いを表し分けること、同じ「つくる」でも「料理を作る」「酒を造る」「新しいスタイルを創る」などと書き分けて、ことばで表しきれない感覚を表現する機能である。日本人は漢字という厄介な文字を手懐ける過程でその方法を身に付け、それを学問・教養の証（あかし）としてきた。

情報化と漢字

ワードプロセッサが市場に現れたのが1980年代初、それから15年後にはパーソナルコンピュータが普及を始めた。ワードプロは20年ほどで製造が打ち切れ、現在はパソコン・タブレット型端末の普及率が90%を越えている。固定電話（加入電話）の普及率が50%に達するのに80年かかったのと比べると、そのスピードは正に驚異的である。

情報機器の急激な発達・普及は、文字と文字文化にも大きな変化を起している。キーボードを叩いたりパネルに触れたりして入力すれば画面上で文書を作ることができ、それを印字すると規格化された美しい字体が出現する。文字は書かなくても記せるようになった。しかし、機器は文字から書く人の個性を奪う。気持ちを込めて書くという行為、手書き文字の味わい、筆跡から伝わる書き手の気持ちや人柄、それらは文字の文化そのものである。情報化社会は今後このような手書きの文字文化をどうしようとしているのか、見極めと対応が求められている。

機器によって、書けない漢字、読めない漢字、それどころか知らなかった漢字まで画面から選んで使えるようになった。パソコンはJIS漢字の第4水準まで（10,050字）を使用可能にしているから、「朦朧」「矍鑠」などといった難しい表記や「相応しい」「流石に」のような熟字も簡単に使える。使える漢字が増えても、読める漢字、わかる漢字が増えるわけではないから、拡大する心配のある「使う漢字」と「読める漢字、わかる漢字」との差をどのように縮めるかも情報化社会の大きな課題である。不特定多数の人が読む文書、特に多くの人が知りたいと思う情報を記した文書が難解になりすぎれば、国民の「知る権利」さえ侵される危険性が発生する。